

対しては厳しく批判して、一日として精進を休めることのないのに、他の人に対しては、非常に愛情深く、何事も積極的に指導するとともにその人間性を喜び、愛していこうとする真摯な態度に心をひかれるからであると思う。

注1 尾形働著「芭蕉とその門流」岩波講座

注2 畠倉徳次郎著「方丈記詳解」有精堂

注3 「方丈記と徒然草」永積安明著

西鶴文学に於ける

リアリズムの限界

— 日本永代蔵を中心として —

国文專攻四年九号

尾 坂 綾 子

序 論

西鶴が生きた時代、寛永末から元禄初年まで、十七世紀中頃から半世紀は、中央集権の封建制度の完成期であると共にその反対勢力ともいへば町人階級の擡頭期でもあった。慶長十七年の鎖国令、寛永十二年に於ける参観交代制の確立など、対外的対内的な中央集権の為の新制度はさておき、世襲を建前とする身分制度と家族制度を確立し、個人の価値や尊厳や自由はもとより、人間性をも能う限り否

認して、秩序を保とうとする封建的支配隷属の関係を整備して、自由に伸びようとする被支配階級をしめあげた事はまさしく中世の分権時代に見られないこの時代の悲劇的な特色であつた。

人間の力の認められぬ所に、心の自由の虐げられる所に發展も創造もあり得るはずはない。このような暗闇の袋小路をつき抜けて新しい人間、即ち近世町人は生まれ出たのである。はじめて己れ達の為の新しい歴史の舞台に登場して来た彼等町人にとつては、古い中世の因習的な物の見方を払いすて、新しい自由な物の見方を身につける、その為には大切な養分となる生きた知識を我が物とするという仕事に緊急の課題となつて来ていたのであつた。

内裏様のとてはかになし今日の月 西鶴

というような平等の主張と抵抗の意識を蔵した町人俳諧の成立、ひいてはそういう意識や主張を随所に露出している西鶴文学の武士は以上のような近世前期の政治、経済的ないし思想的諸条件を前提としてのみ正しく理解しうるであらう。

文学が新しい町人の為の文学である為にはそれが他の誰のでもない、町人自身の生活のあるがまゝの再現である事が望ましい。そこで前時代から残されて来た古典や、古説話の素直な近世化や殊更な近世化、もじりやパロデーの他に在来の文学の中からは全然求め得ない新しい題材や主題

の探求が始まる事になつて来る。仏教や儒教に束縛された和歌や、物語風の観念的情趣的な小説とは全く異り、直接に自分の目と耳で捕え、極めて現実的、世俗的な作風にて風びした作家西鶴、そしてその描写は、いずれも詳細を尽くし、鋭く生きた人間の肺腑をえぐるほどのものであつたのである。このようにどこまでも写実主義の作家として取り上げられ、又写実主義的傾向の代表的作家として、世に重んじられて来た西鶴文学を通し、彼の写実がどのような性質を有するかという事は、西鶴の文学的位置を定める上に重要、かつ必要度高きものではないであらうか。今、こゝにそれを詮索してみたいと思うのであるが、写実主義考察に入る前に、一体写実主義、現実主義とは如何なるものか、つまりリアリズムというものの真の意味、内容にふれてみる必要があると思う。

一章 リアリズム論について

リアリズムとは何かという事は、判りきつていゝよう、なかなか難かしい問題を含んでいるのである。それが原始時代から今日までの芸術の大道である事は確かな事であるが、しかしリアリズムという創作方法が芸術の歴史的発展の上で、どのように発展して来たか、又それが芸術のきわめて多様なジャンルの中でどういう特殊化された姿を示しているかなどを前提に、その真意を考察して行きたい

と思う。

リアリズムとは、「現実主義、写実主義」などと訳されている。今日の殆んど全ての文学作品がリアリズム的方向を辿りつゝある事は見違す事の出来ない事実である。リアリズムが特にその創作方法として意識的に主張されているのは、プロレタリア文学の陣営内に於いてであるといわれるが何れにしろ、このように古いリアリズムが再び呼び醒まされたのは、そこに何等か特殊な現代的な意味がなければならず、新しい何物かの為に甦生したのでなければならぬと思うのである。

ベリンスキーは、リアリズムというものについて次のようにのべている。

「我々は芸術が現実をあるがまゝに我々に示す事を要求しなければならぬ。何故ならば現実とは、たとえそれがどんなものであらうとも、それはモラリストのあらゆる思いつきや教訓よりも、より多くの事を我々に語り、より多くの事を我々に教えるからである……」^(註)と。

こゝでは芸術、とくに文学の傾向や態度や方法は時代の移り変りと共に變つてゆく、つまり、リアリズムの文学が要求されるのは、時代の要求だといふのである。

芸術家が描こうとするもの、それは現実の中に既に豊富に横たわつていゝのである。しかしたゞ、それを見うるものは芸術家の純粋な目なのである。しかし「現実」は作者

の眼、主観を外にして存在するものであるから、それはそれ自身の存在と發展を持つてゐる事になるのである。エンゲルスは言う。

「私が念頭に置いた所のリアリズムは作者の見解に反対してさえ顯れるのである……」と。上記のようにその時代の現実、つまり歴史の推移發展がリアリズム文学を要求するという事は、リアリズムがそれ以前の道德的、哲學的文學よりも、より深く、強く時代精神を表現しうるからである。このようにリアリズムが文學史上に現われて来たのは十九世紀に入つてからであり、我が国日本に於いては、明治維新からの事であつた。だがそれが風俗描写に於いて新時代を反映してゐるのみで、その本質に於いては末期江戸戯作の完全なる延長であつた。つまり我國に於けるそれは西歐のような力強さはなかつたのである。以上の如き流れから今、町人物として名高き「永代蔵」を通して、その写実主義的表現、リアリズムの限界を考察する必要があるのである。

註(一)リアリズム研究本文中より

註(二)現代文學論争史

第二章 「永代蔵」概観

元禄元年一月、西鶴文學に於ける町人物の最高作「永代蔵」は發刊された。

「永代蔵」は、西鶴がはじめて町人本来の經濟生活と取り組んだめざらしい作品なのである。そこに表われた町人生活の種々相は、従来の享樂生活を描いた好色物や奇怪談を集めた諸国咄とは異つて、近世の商業資本主義の發達に伴つて活躍を始めた町人の經濟生活を扱つたものである。だからそこには、有名無名の町人が登場し、細かい金の計算もやつてみせるというような、日本小説說史上でも破天荒な試みが行われたのであつた。

「永代蔵」には、まず成功して金持になつた例が多出してゐると同時にその反対に、失敗して無一文になつた例話も少なくない。前者の金持になつた例が多く集めてゐるのは、人間の智慧才覚というものがいかに町人の成功に必要なかという事の実証の爲にあげてあり、西鶴はそこに町人の理想像を見出そうとしてゐるのである。

十三年目に錢一貫の借錢を八一九二貫にして返したその正直さの故に出世した舟問屋、北浜の米市で塵米を集め、それがもつて成功した両替屋等々、これらは皆人の知らない工夫や努力を積み重ねて成功した町人群像であり、全く「おのれが性根によつて長者にもなる」の実例なのである。だが又、それらの反対の実例も案外多く見出される。

遊女への手紙と金を拾い、それを届けに行つて遊んでしまひ、忽ち破産してしまふ扇屋の二代目、今まで十匁持つて年を越した事のない上に、ある年の暮、雷が落ちて最後

の世帯道具までくだかれてしまふ醬油売りの喜平治等々、(巻二、三)
これらは前の成功者とは異つて、その心がけ次第で失敗し
破産し、亡びた町人達の愚かな姿なのである。

これらの成功者或いは失敗者の例を通し、作品のねらい
はどんな効果を示しているかというところ、結局はこの作品の
随所に見られる町人倫理「おのれが性根によつて長者にも
なる事ぞかし」の実証としての具体例が役立つている事は
言うまでもないことである。

「性根」それは商業資本主義が確立されて、はじめて町
人に要求されて来た個人的美德であり類型でもあつた。野
田久雄氏は言う。

「智恵才覚、正直勤勉、節約計算、それらの美德は、商業
資本主義そのもの、世界共通の家憲であり秘けつである」(注一)
と。

たとえばこの美德、特に節約という倫理の形象化に先鞭
をつけた一篇は「世界の借屋大将」である。主人公藤市
は道でけつまづいて転んだ処で火打ち石を探したとか、餅
はさまして受け取つたとか、次から次に出て来る節約の精
神そのものを造型化しているものであり、その造型があま
りにも極端に描かれており、思はず吹き出したくなる位い
であるが、実にそこにこそ作者の時代精神の適確な把握と
文学的造形のたくみさを感じられ、圧倒的な感動を受ける
のである。この事こそ文学者の痛烈なる本格的散文精神と

いうものではないであらうか。

かくの如く「永代蔵」には、西鶴の現代意識や散文精神
が見事に發揮され、その町人倫理の把握、又その形象化、
そして社会風俗の活写が見られるのであるが、それはやは
り、好色物に出発して、諸国咄、武家物とたどつて来た彼
の文学の帰結であつたと言つても過言ではあるまい。

註(一)国文学「解釈と鑑賞」春の特集号

三章 そのリアリズムの限界

本格的なる精神、すなわち現代人の持つている危機感と
反省とを身につけ、その中から具体的な造型を行つていく
という精神をもつて、暫間的生活の裡にあわたゞしく去来
する人間の運命と、榮枯盛衰とを眺め暮らした西鶴は、同
時に又、こういう生活のうち静かに世と人とを觀じ乍ら
も、与えられた自己の運命と自然の運行とを楽しんでた
男でもあつたのかもしれない。免にも角にも俗を離れ乍ら
も逆に、俗そのものを進めるに至つた西鶴の強力なる描写
は、無着意なる心を懐きながらも現実を肯定するという世
界を生むに至つたのであらうが、その世界即ち、当時の町
人の生活は、社会の最下級に置かれていて、又極端な拘束と
峻厳な弾圧とを余儀なくされていたのであるから、活動の
自由は極限されていたわけである。彼等の欲望がたとい社
会上の地位にあつたにせよ、政治上の見識抱負を彼等有

していたにせよ、一切は空想にも等しいものであつた。従つて町人の欲望は金銀を取扱ふ経済生活の範囲内に於いてのみ可能であり、勢い物質面にのみ狂奔せざるを得なくなつたのであつた。

ひそかに思ふに、世にある程の願ひ何によらず銀徳にて叶はざる事、天が下に五つあり。それより外はなかりき、これにまじたる宝船のあるべきや。(徳ソ)

このように、自由な活動と一切の欲望を遮断された町人にとつては、この世はまことに無情なものであつた。経済生活の勝利者は金銀のみを以て、唯一の光背として武士に對抗する、といつても表面的ではなく、心底に潜む反抗力としての意見を誇示するか、さもなければやるせない己が思いをはらすべく、紅燈緑酒の巷に彷徨するかであつた。まさに一寸先は闇の世であつたといえるのである。一切の道徳的批判の埒外に置かれたその色里では、遊女は天女にも等しい憧憬の対象でもあつたであろうと同時に、金銀に恵まれた者のみに与えられた一種の特権的世界、理想郷でもあつたのである。この官能の観喜愉悦に浸る為には家産の蕩尽も辞する事がなかつた。彼等は知性の代りに貨幣というもので律られていたからである。ひたすら自己の安楽を願う致富の道でもあつたわけである。

「われ一代今一たびは長者になし給へ。子供が代には乞食になるともたゞ今助け給へ」(卷三、五)

の例文の如く、哀切極まりない叫び声には、子々孫々に至るまでの繁栄を願う心は毫末も伺われないのである。

こゝで前出したベリンスキーの言を思い出して見る。

「我々は芸術が、現実あるがまゝに我々に示す事を要求しなければならぬ……」と。

然り、この言葉、思想はまさに、このような社会をその名文に於いて、我々は当時の金という一本の綱によつてあくせくと生活し、油断大敵の如き世相をありありと思ひ浮べられ、西鶴文学に於いて明らかに立証される事と想うのである。心にくいまでに現実の世相をその短い作品中に表現しきつた西鶴は、一体どのようなまなこを持つて当時の世相を眺めたのであろうか。それは人間の自由、平等、無差別を唱え、武士も神主も出家も百姓も職人も町人も万人共に変わる事はないといつた考え、この事こそ、芸術家西鶴の純粋な眼ともいえよう。然らば、平等なるべき町人社会に於いて、貴賤上下の差別の感じられるのはなぜであらうか。彼は即ち、金銀の有無によつて決する事と考へていたのである。それが為に「若き時よりかせぎて分限」とならなくてはならないというのである。しかし作中「茶の十徳も一度に皆」(徳州、四)に於ける如く、不当なる手段にて富み栄えた者に対して西鶴は、とことんまでにくみ罰したらしく、作中にては天罰として書き記されてはいるものゝ、明らかに西鶴の悪に対する強調なのである。然もその強調が決して単

なる強調に墮する事なく常に作者の内部に働く強いリアリズムで一貫されているといえるのである。徹しなれば徹するまでは無反省に突き進まなければ何うにも気の済まない、一種のエクセントリックな人間ともなつたのである。

次には『永代蔵』即ち町人物というものがいずれも純粹な短篇集であるという点から彼の写実力を眺めてみよう。

作者はその個々の短篇の全てに於いて彼に最も適した活動の世界を見出しているのである。そこには、描かれた世界の絢爛さと、取扱われた材料及び主題の蠱惑的な点に於いては、それは無論好色本に及ばなかつたけれどもその落着いた味の深さに至つては、もとより好色本の多くは求められないものであつて、そこに描かれた金銭をめぐつての材料、及び人間心理というものゝ詳細なる觀察力は他の何物にも及ぶ所ではないであろう。当然次には、西鶴がこの作品に於いて「金」というものを如何に見ていたかという疑問に帰結するのであるが、当時の町人達は自ら、人生に対する一切の可能を金に見出していた。前出した

ひそかに思ふに世に有る程の願ひ何に……
や、又

人の家に取りたきは梅桜松楓、それより金銀米銭ぞかし（巻一ノ二）

というような猛烈な黄金万能主義が、当時の人間には胸底深く刻み込まれていた。色濃い拜金主義の世相が展開され

ていたのである。金を通して見た世相、この意味で町人物に一貫した主題は言うまでもなく金である。金即心、花袋が云つている其の気持なのである。金がしみ込んだ心の現われと人間の動き、西鶴は町人物に於いて、それを正しく描破したのであつた。

「世は皆富貴の神仏を祭ること人の習はしなり、我は又人の嫌へる貧乏神を祭らん……」（巻四ノ二）

の如く主人公夫婦が、人の嫌える貧乏神を祀るのは、金がない故の捨て鉢であり、「才覚を笠に着る大黒」の主人公が、犬の死骸を狼の黒焼と欺称して売歩くのも金が生んだ罪悪である。

すべてその源は金の成せる業である。が然し、こうして金への深い理解を示しながらも、西鶴は決して黄金万能の世相に同感を持つてはいなかつた。「金銀瓦石におとれり」というように、彼にも幾分黄金万能の世相に反対する気持のあつた事が知られるのであるが、此の否定は、実は金其物への否定ではなかつた。『五人女』を書き、『艶隠者』を書いた彼としての人生觀から来た金の否定であつた。

こゝらで、西鶴作品全体を眺めてみよう。そこには近代小説に於ける写実とは種々の点で相異のある事に気づく。才一にそれが短篇の集合であるという事、「好色一代男」に於いては、世之介という男の生涯を五四章を通して書かれてはいるものゝ、各章を切り離して味う事が出来るし、又

当作品「永代蔵」に於いては、全体にわたる主人公は存せず、まがう事なく短篇の集合という形態をとつてゐるのである。

久松潜一博士は彼の写実について次のようにのべておられる。

「西鶴の作品を読む時、近代の長篇小説に於ける緊密な構想や表現に於ける描写性は見られないにしても、西鶴の文学を優れた写実の文学であるという事は云えると思ふ」と。

又、尾崎久彌氏は、その著『江戸小説研究』において

「……私は決して単なる写実主義な男だとは云いたくない。近松ほどの甘い感情的な詩人ではなかつたが、清楚な美を美とする淡泊感に生きた、やはり詩人であつた」とい

(註二)

つてゐる。西鶴のリアリズムが、今日の我々の目から見て人生をその全面的な統一的な規模に於いて捉えようとするものではなく、人生をその感情生活の面に局限して、これと取り組もうとするようなりアリズムであつた事、現代に於いては、もはやそのまゝでは正しくリアリズムとは呼ばれないようなものであつた事は、我々の近世リアリズム一般が担わせられていた運命であつた。

基本的な構成要素であり、時代の先導者でなくてはならぬ筈の町人は、政治的社会的には周知のように自由無き身であつた。その為、色欲や物欲の形を取つて成育せざるを

得ないわけである。西鶴が長篇小説を構成し得なかつたという事実も又右の事情と結びついている。個人的に見れば、あの談林俳諧師としての長い修行が長篇を書き得なかつたと考えられるが、西鶴に限らず、近世全般を通じて我々は真の長篇作家の名に値する者を唯の一人も持つていない。

西鶴のリアリズムが、ひいては近世リアリズムがこのように局限せられたものであつた事は、歴史的な運命であり、それはそれなりに最大限にその威力を示し、大きな文学的建設を成しとげたものが西鶴のリアリズムであつた事は、これ又看過される事の出来ない所である。しかし乍ら西鶴のこのリアリズムにも限界はある。既述したように、彼の作品は皆短篇の集積である。世の相をありのまゝに捕えたといつてもそれは断片の形で捕えたのであつて、大きな構成を以て捕えたのではない。社会一般を有機的に認識し、その現在ある姿をあるべき姿にどう持つて行かうなどの考えはまだ見受けられない。その文章にしても常套を離れた濃刺さは持つてゐるが、リアリズムの鋤でもう一つ深く掘り下げず、或所ですると俳諧的に逃げてしまふ老獪さがあるのである。

以上に於いて「リアリズムの限界」というものゝ解答として、彼の作品が短篇の集積であつたという所にその限界があると思ふ。

註(一)国文学「解釈と鑑賞」春月特集号
註(二)国文学「解釈と鑑賞」六月特集号

むすび

以上『永代蔵』一卷を通して西鶴のリアリズムの限界を考察したのであるが、結論としてその限界とする所は、彼の作品が俳諧的思想をおびた短篇の集積であつた事に帰着した。町人文学の持つ価値が、その写実性の上にあつた。有るがまゝの彼等の生活を描いて人間性の写実を写し出した、その写実の優秀なる上にあつたのである。

浮沈多き社会、一寸の油断から忽ちにして転落するような社会、変動多き社会生活に於いては、明日の事よりもその日、その時の事が大切となつて来るのである。いわば刹那に生きる人間とでもいうのであろう。まさに戦々兢兢とした時代の反映だつたのである。

参考文献

- 一、リアリズム研究
- 「リアリズム論について」
- 一、西鶴
- 一、井原西鶴
- 一、西鶴研究ノート
- 一、リアリストとしての西鶴
- 一、西鶴のリアリズム

以上

- 古在 由重著
- 岩上 順一著
- 近藤 忠義著
- 片岡 良一著
- 暉峻 康隆著
- S・Hヒベット著
- 松井 定之著

- 一、近世生活と国文学
- 一、江戸小説研究
- 一、近世小説史上万篇
- 一、町人文学
- 一、全集『日本永代蔵』
- 一、西鶴評論と研究下
- 一、現代文学論争史

- 麻生 磯次著
- 尾崎 久弥著
- 相磯 貞三著
- 藤村 作著
- 久松 潜一著
- 暉峻 康隆著

晶子・白秋・茂吉歌

に於ける助詞の研究

隈 部 幹 子

序 論

私は、与謝野晶子、北原白秋、齋藤茂吉については、くわしく、深くは知らない。しかし助詞の調査をすることによつて、彼等の歌風なり、性質なりをいくらかでも明らかにすることができればと思つて、三人の助詞の統計をとつてみるのである。

さてここで、なぜこの三人を比べる事にしたかを、ちよつと述べてみようと思ふ。

まず晶子と茂吉であるが、